

約束により国会図書館に寄付するのが当然のように言われた。私達兄弟は亡父（忠三郎）の心情からも寒川さん一族にあまり良い印象はない。無論、子規庵や遺墨を守られたことは認めるが。私の印象では田浦という方、今のところ、信頼する訳にはいかない。まづばら様から我々兄弟に何卒良いアドバイスを願いたい」（要旨抜粋）とあった。

その夜、明氏の方からも同様の電話が入った。彼の所にも来たのである。明氏は保存会提案に「少し考えさせて欲しい」と答え、その頃交流の始まっていた稲畑汀子氏（虚子・孫娘）にも伝えるよう進言したとのこと。

その直後、浩氏からも電話が入り、葉書で伝えられなかった話を聞くことが出来た。

半世紀行方不明の『仰臥漫録』は思いもかけぬ場所で現存していた。「最初はとにかくびっくり、そして良かったなあが実感で何の疑いも抱きませんでした」（原文）と翌年明けの明氏書簡にある。

保存会が子規百回忌記念事業を通じて旧来の体質から変わって来ている様子は、ご両人共、私と同道し、去る九月子規忌に、根岸を訪れ目の当たりにしている。台東区俳句人連盟・松崎会長、石川事務局長にもご挨拶をした。しかしその時はボランティアが保存会の担い手との認識は誰からも得ていない。田浦氏は不動産屋、寒川知佳子氏（鼠骨・孫娘）と交替した